

博士学位論文審査要旨

2021年1月18日

論文題目： 変わりゆくアジアの価値観：幸福・所得・格差

学位申請者： 滝本 香菜子

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 川浦 昭彦

副査： 総合政策科学研究科 教授 藤本 哲史

副査： 総合政策科学研究科 教授 新見 陽子

要 旨：

本研究の目的は、3つのリサーチ・クエスチョンから幸福に関するアジアの価値観を明らかにすることである。第1のリサーチ・クエスチョンは、所得が増えても一定の水準以降では幸福度が上昇しない「幸福のパラドクス」と呼ばれる現象が、アジア諸国において観察されるのかということである。次にアジア特有の幸福要因は存在するのか、そしてそれが存在する場合には男女差はあるのかということである。そして最後のリサーチ・クエスチョンは、女性の間で観察される幸福度の格差が何により生まれているのかということである。これらの問いへの答えを求めるために、「アジア・バロメーター調査」から7か国の個票データを分析している。

第1章では幸福研究の歴史、幸福の定義を含め、本研究の背景、問題意識を説明し、3つのリサーチ・クエスチョンを提示している。

第2章では利用する「アジア・バロメーター調査」の概要・質問項目を詳細に説明し、本論文での分析対象とする7か国について所得と幸福度の関係について予備的な分析をすることで、「幸福のパラドクス」の有無を検証している。

第3章では幸福度の決定要因を順序プロビット分析により解明することで、アジア特有の幸福要因の存在を確認している。分析結果が示すアジア7か国共通の幸福度決定要因として所得、生活水準、年齢、婚姻状況、ジェンダー意識、住居、世帯構成、介護、宗教の9変数が統計的有意水準を満たすことが明らかとなった。そのうち年齢と幸福度の関係については、年齢を横軸、幸福度を縦軸としたグラフではU字型となることを多くの先行研究が報告しているが、この章の分析によればアジア諸国でも同様の関係が存在する。さらに幸福度が最も低くなる年齢と各国の平均寿命が相関していることも示された。幸福要因の男女差についての分析によれば、婚姻状況、ジェンダー意識については幸福度への影響が男女間で異なっている。

第4章では **Recentered Influence Function** 分析を用いることで、同じ国の女性の間において観察される幸福度の格差がどのような要因により影響を受けているかが考察されている。その要因は上述の幸福度決定要因とほぼ重なるが、幸福度決定要因には含まれない学歴と就労状況も女性間での幸福の格差を拡大あるいは縮小させることが明らかになった。

第5章では第2章から第4章までの分析結果を要約し、アジア地域では物質的な豊かさに囚われないことが幸福の秘訣といえる可能性を示唆している。豊かになりたいという欲求や欲望が強いほど幸福度が低くなるのではないだろうか。そして、物質的な豊かさに囚われなくなるほど幸福になるのではないかという仮説を、今後の研究で明らかにすべきテーマとして提示している。

幸福度の決定要因に関する従来の研究は主に欧米諸国を対象として行われて来た。本研究は様々な発展段階のアジア諸国のデータを利用することにより幸福研究の対象を広げたという点

で、当該分野の学問的知見の蓄積に大きく貢献している。

よって、本論文は、博士（政策科学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2021年1月18日

論文題目： 変わりゆくアジアの価値観：幸福・所得・格差

学位申請者： 滝本 香菜子

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 川浦 昭彦

副査： 総合政策科学研究科 教授 藤本 哲史

副査： 総合政策科学研究科 教授 新見 陽子

要 旨：

滝本香菜子氏に対する総合試験は、2021年1月16日の午前10時より志高館SK118教室において1時間にわたり公聴会形式により実施された。滝本氏が論文の概要について30分間のプレゼンテーションを行い、続いて滝本氏と審査委員との間で30分間の質疑応答が行われた。

審査委員からの質問は2つに分けられる。まず幸福という概念およびそれを表現する言葉の選択、そして幸福は個人の知覚と独立して存在するのかという幸福の研究の枠組み自体に関わるものである。もうひとつは、計量分析に用いる変数の定義、所得を世帯単位で計測すべきか個人単位とするべきか、さらに順序ロジット分析で得られる変数の係数と限界効果の統計的有意水準など、分析手法の詳細に関するものである。滝本氏はいずれの質問に対しても的確に真摯な態度で回答することで、研究テーマ・分析方法に関する自身の理解について審査委員全員の納得を得ることができた。

語学試験については、幸福研究の分野での先行研究の検討において滝本氏が多くの英語文献をレビューしており、その理解も的確であり誤りがないことから、研究に必要な英語の運用能力を滝本氏が十分に有していることを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士学位論文要旨

論文題目： 変わりゆくアジアの価値観：幸福・所得・格差

氏名： 滝本 香菜子

要旨：

アジアには、幸福に対する共通の価値観があるのだろうか。従来の幸福研究は、欧米を中心に進められてきた。経済学は本来、人間の効用（幸福）について考える学問である（Frey 2010）。伝統的な経済学では、GDP で測る所得を幸福の代理指標としてきた。Easterlin (1974) は、所得が増えても一定水準以降、幸福度が上昇しない現象（幸福のパラドクス）を発見し、その理由を相対所得仮説（人々は幸福度を社会規範や生活水準など他者との比較によって相対的基準で評価する）として説明した。それに対して Veenhoven (1991) は、上記論文と同じデータを利用し、幸福度と所得に緩やかな正の相関を発見した。所得と幸福度は、所得の増加に伴い逓減する限界効用と同じく、その関係は線形ではないとも指摘される（Helliwell 2003）。

加えて、人間の効用（幸福）は、お金（所得）だけでは決まらない。OECD 幸福白書によると、「主観的幸福、所得と資産、住居、仕事と報酬、健康状態、ワーク・ライフ・バランス、教育と技能、社会とのつながり、生活の安全、市民参加とガバナンス、環境の質」の 11 の側面から幸福の価値観は影響を受けるとされる。こうした幸福の価値観の基本的枠組みは、欧米諸国の比較分析から決定されてきた。2006～18 年の幸福度の平均値は、欧米は高い値（欧州 6.5～7、北米 7.0～7.5）で推移している。一方で、アジアは欧米よりも低い値（東アジア 5.2～5.5、東南アジア 4.5～5.5、南アジア 4.0～5.2）で推移している（World Happiness Report 2019）。アジア地域の幸福度は低いにもかかわらず、一地域や数カ国の比較研究に限定される。幸福研究は欧米諸国を中心に進められてきたため、アジアの全体像は把握できていない。また、幸福度の男女比較は主に欧米を対象に広く行われ、男性よりも女性の幸福度が高いと指摘される（Frey 2008）。アジア地域では欧米よりも女性の地位が低い。女性の社会的に弱い立場は、教育・結婚・職業などライフイベント全般に影響する。しかし、俯瞰的に同地域の女性の幸福度を分析した研究は極めて少ない。

一方で、アジア地域では経済成長を遂げることを目的に国の開発や発展を進めてきた。言い換えると、国の目的としてきた高い経済成長によって、幸福は得られたのだろうか。本研究は、経済発展の段階が異なるアジアの 7 カ国を対象に幸福の価値観を明らかにすることを目的とする。7 カ国の選定基準は、世界銀行の分類である先進国、新興国（上位中所得国・下位中所得国・低所得国）の 4 段階を網羅する国を選択した。具体的には、先進国（日本・韓国）が 2 カ国、新興国が 5 カ国の内、上位中所得国（中国・マレーシア・タイ）、下位中所得国（ベトナム）と低所得国（ミャンマー）である。利用したデータは、アジア・バロメーター調査の 2003～7 年である。分析方法は、順序プロビット分析および Recentered Influence Function（以下 RIF）分析を利用した。

本研究では、以下 3 点のリサーチ・クエスチョンからアジアの価値観を明らかにする。1 点目は、「アジア地域の国際比較における幸福のパラドクスの有無」である。所得と幸福度の国別比較の結果、韓国と中国では幸福のパラドクスの傾向が確認された。2003 年の分析の結果、韓国では 6,000～6,600 万ウォン、中国では 70,000～80,000 元に所得の飽和点が確認される。幸福のパラドクスが確認されない国では、所得と幸福度の関係は 2 つの傾向に分かれた。第 1 のグルー

プでは、所得の増加に対して幸福度も増加し続ける、所得の飽和点が確認されない傾向にある。第2のグループでは、所得の増加の幸福度に対する影響が小さく、幸福度の平均値が変わらない傾向にある。前者には日本、ベトナムとミャンマーが該当し、経済成長の段階にかかわらず所得と幸福度は影響しあうといえる。後者にはマレーシアとタイが該当し、いずれも幸福度の平均値は7か国中において最も高い水準にあり、所得の影響が小さいことが高い幸福度に繋がるのかもしれない。

リサーチ・クエスチョン2点目の前半部分は、「個人の特徴からみたアジア特有の幸福要因は存在するのか」である。順序プロビットを用いた推定の結果、アジア7カ国共通の幸福要因としては、所得、生活水準、年齢、婚姻状況、ジェンダー意識、住居、世帯構成、介護、宗教の9変数が統計的有意水準を満たした。なかでも10%以上の限界効果が確認された影響の大きい変数は、生活水準と婚姻状況である。生活水準では2003年の推定の結果、生活水準が「高い(0.3159)」場合に最も大きくプラスに影響する。反対に2006,7年の推定の結果からは、生活水準が「低い(-0.1663)」場合に最もマイナスの影響が大きい。同じく影響の大きい婚姻状況については、2003年の「離別(0.1032)」が女性ダミーとの交差項においてプラスで最大、2006,7年の「離別(-0.1056)」がマイナスで最大となる。つまり、アジアにおいては離婚や別居が幸福に対して大きく影響する。

リサーチ・クエスチョン2点目の後半部分は、「アジアの共通する幸福要因が存在するならば、男女差はあるのか」についてである。分析の結果、男女差が確認された変数は、婚姻状況とジェンダー意識である。2003年の婚姻状況の推定結果からは、独身の女性は独身の男性よりも2003年には幸福であると観察された。同年の離別した場合においても、男性よりも女性は幸福度が高い。加えて、2004年の推定結果では、死別した場合も男性よりも女性の幸福度が高い。従来の研究で指摘されてきたように既婚者の幸福度は最も高いが、男女差があることが示唆された。独身や離別、死別した男女間においては女性の幸福度が男性に比べて高い。こうした結果は、アジアの社会構造において男性の地位が高く、女性の地位が低いことにも起因するのかもしれない。つまり、アジアの7カ国においては、男女でパートナーの存在意義が異なる可能性がある。

加えて、アジア特有の幸福の特徴として、年齢と幸福度の関係があげられる。推定結果からは、7カ国平均で最も不幸な年齢は53.6歳であることが確認された。加えて平均寿命が長い国ほど、最も不幸な年齢も高くなる傾向がある。具体的には、調査当時の平均寿命を確認すると、日本が82.3歳、韓国が77.2歳、中国が73.3歳、タイが73.9歳、ミャンマーが61.3歳である。もっとも不幸な年齢を確認すると、日本が53.2歳、次に長い韓国が48.5歳、中国が44.5歳、タイが45.1歳、ミャンマーが39.4歳となる。寿命によって就職や結婚、出産、転職や介護など様々なライフイベントの時期が決定され、それらが幸福度に影響することが考えられる。幸福は単に身体的な年齢に左右されるのではなく、ライフイベントによる影響が大きく、平均寿命と幸福度には一定の関係があることが示唆された。

リサーチ・クエスチョン3点目は、「国別に女性の幸福は異なるのか」についてである。RIF分析を用いた推定の結果、同じ国の女性間においても幸福度に違いがあり、幸福の不平等が生じていることが示された。女性の幸福度に対して、その不平等を拡大または縮小させる要因が検出された。国別のRIF分析の推定結果によると、幸福の差を生む要因は、所得、生活水準、年齢、学歴、就労状況、婚姻状況、ジェンダー意識、世帯構成、介護、宗教の10変数である。その内、国別に反対の影響が確認された変数は、学歴、就労状況、婚姻状況、ジェンダー意識、世帯構成、宗教である。RIF分析の推定結果は国によって異なり、学歴が低いことが日本やマレーシアでは幸福の不平等を拡大させるが、韓国では縮小させる。

本研究から導かれる結論として、アジア地域では物質的な豊かさに囚われないことが幸福の秘

訣といえるかもしれない。幸福度の分析結果からはアジア地域の中でも経済発展を遂げ、物質的には恵まれた環境にある日韓や、高い経済成長率を維持する中国の3カ国が幸福度の平均値からは、必ずしも最も幸福であるとはいえなかった。アジア7カ国の内、統計的有意水準を満たした6カ国を幸福な順に確認する。国名（限界効果の平均値）は、マレーシア（0.1397）、ベトナム（0.0944）とタイ（0.863）、日本（ベースライン）、ミャンマー（-0.0464）、韓国（-0.0560）となる。6カ国中最も幸せなマレーシアでは、統計的に有意と推定された生活水準の変数が最も少ない。反対に最も幸福とは遠い韓国ではすべての生活水準ダミーの係数が有意水準を満たした。物質的な豊かさに囚われるほどに、幸福度が低くなる。つまり、イースタリン・パラドクスのように明確な結果を得ることはできなかったが、アジアの国々では幸福と物質的な発展は必ずしも比例しない。実際に物質的に豊かであるかどうかよりも、豊かになりたいという欲求や欲望が強いほど幸福度が低くなるのではないだろうか。

アジアの女性に着目した分析結果からは、アジアの幸福においては、学歴偏重主義や男性優位な社会構造など非常に近い価値観が存在する。一方で、同じ学歴偏重主義の社会でも幸福度に対する影響や物質的な豊かさの幸福度に与える影響など、全く異なる側面も同時に存在するといえる。共通点と相違点を明確にすることは、アジアの国々が対立するのではなく、歩み寄るために必要である。幸福を通して互いの理解を深めることが、今後のアジアの更なる発展の一助に繋がることを願い、本研究のまとめとしたい。

(3,978字)